

『フレンチレストランにて』

西岡充(父) 西岡公平(息子) 桑野和泉 シェフ、その妻

小さな川の近くのフレンチレストラン

充「ま、でも、一番はやっぱり、全体の雰囲気なんです。その物が持つてゐる感じっていうか、発している光っていうか。ブランド品の財布やバッグなら、それでわかりますね」

和泉「ああ、なるほど。本物にはそれなりの本物らしさがあるんですね」

充「ええ。偽物にはまず品がありませんね」

和泉「品ですか」

充「気品っていうか」

和泉「ああ、輝きみたいなものですか」

充「そうですね、そうそう、シャネルの財布とかが顕著なんです。なんか、おかしいんです。シャネルのマークあるでしょう。あれが、全体のバランスを壊して、ちょっと大きめになってるんです。わかりますか」

和泉「ええ」

充「ほんのちょっとのことで野暮ったくなるんですね」

充「どうしました」

和泉「あ、いえ、公平くんが」

充「え」

和泉「どこに行ったかなって」

充「いませんか」

和泉「ええ。さっきまで、そこで遊んでただけど」

充「川、降りてったかな」

和泉「大丈夫かな」

充「大丈夫でしょう」

和泉「あ、もどって来た」

妻「牛胃袋と野菜の白ワイン煮込みニース風と西有明町じげもん豚ロースのロースト シェリービネガーソースです」

和泉「おいしそう」

充「ここのはほんとおいしいですよ」

妻「ありがとうございます」

充「ご主人は、南フランスに行ってたんでしょう」

妻「ええ、6年ほど」

妻「それから、仔羊背肉のローストです。仔羊のジュにミントの香りをつけております。マスタートードはこちら にあります」

充「はい」

充「おい、公平。こっち来て食べなきゃ」

充「席立ったりしちゃだめじゃないか」

妻「お飲物、いかがですか」

充「あ、じゃ、グラスワインを。桑野さんは」

和泉「あ、私もいただきます」

妻「かしこまりました」

充「あ、水もらうか」

公平「うん」

充「すみません。お水、いただけますか」

妻「はい」

公平「蚊が出るね」

充「え」

公平「蚊が出るよ」

充「今ごろいるわけないだろ」

公平「夏になったら蚊が来るよ。今はいいけど、そこの川には、蚊がたくさんいると思う」

公平「父さん、蚊がたくさん湧いて出て来るぞ」

充「いいから、食べなさい」

充「たまにへんなこと言うんです」

公平「へんなことじゃないだろ」

妻「どうぞ、ワインです」

充「正直、驚いてます。もう一度、会えるって思ってなかったの」

充「電話もらったときはびっくりして」

充「あ、いや、でも、えっと」

和泉「はい」

充「その、こうやってお話しして、話がいろいろ進むとか、そういうことを言ってるんじゃないんです」

和泉「あ、はい、わかってます」

充「そういうことを期待してるんじゃない。あ、でも、驚いたのは本当で、桑野さんとまた一緒にお食事できるだけでも、うれしかったんです」

充「公平もうれしかったよな」

公平「うん」

充「あ、まだ、食べてる最中ですけど」

充「そのことが、今、実現してるって言うか、そういうことなんですけど」

和泉「はい」

公平「お父さん」

充「うん？」

公平「iPad 貸してくれよ」

充「食べ終わってからな」

公平「じゃ、買ってくれ」

充「今は、そんなこと言うもんじゃない。今は、そんなことを言うタイミングじゃないんだ」

公平「中学行ったら買ってやるって言ったじゃないか」

充「お前、まだ中学生じゃないだろ」

公平「来月から、中学生だよ」

充「まだ、小学生じゃないか」

公平「もう卒業式終わったって」

充「入学式はまだなんだろ」

公平「そこ、そんなにこだわるとこなのかよ」

公平「小学校の卒業式が終わって、中学校の入学式がまだでも、そのうちあるんだから、ほとんど中学生のよ うなものじゃないか。ね、そうでしょう。絶対あるんだから。学校は。これからもずっと。だって入学式なく ったって中学生にはなれるんじゃないのかな。そうじゃなかったら、この時期のやつらは一体なんなんだよ。 中途半端かよ」

公平「なあ。なあ。なあ、父さん」

充「すいません」

和泉「え?いえ」

和泉「手紙を書きました」

充「手紙?」

和泉「ええ。昨日出しました。まだ、届いてないでしょう」

充「ええ、あ、そうですか」 和泉「今頃、届いてるかもしれません」

充「ああ、なるほど。そうですね」

和泉「今日、お話すること、手紙のほうが、きちんとお伝えできる気がして、おとといの夜、一気に書きました」

充「へー。そうですか」

和泉「でも、今日、なにもお話ししないで、帰ってから手紙読んでくださいってことじゃないんですよ。やっぱり、これ以上おつきあいはできないって、ちゃんと言おうと思って来ました」

充「はい」

充「あの。お仕事のことなら。この間は、辞めたほうがいいのか言いましたが。そんな、私のほうからそんな こと言える立場じゃないし、だって、収入だって考えてみたら桑野さんのほうが多いかもしれませんし、あ、 いや、お金のことなんかどうでもいいんですけど、あ、どうでもいいって言うか、そんな、テレビの仕事なん て誰でもできるものじゃないわけだし」

和泉「地方のテレビ局ですから」

充「いや、でも、いきなり辞めるほうがって言ったのは後悔してるんです」

和泉「結婚ということになったなら、それも考えたかもしれません。ですから仕事のこと、というより、その」

充「あ、そうか、そうですね」

和泉「すいません」

充「いえ、そんな」

充「じゃ、手紙、読みます」

和泉「出さなきゃよかったって思ってます。そういうことになるだろうなって、思って出しました。ポストの前で、ずいぶん考えて、1分ぐらいのことなんでしょうけど、ずいぶん長い時間を感じました。なんか、かーって焦ったようになって、でも、赤いポストってすごいですね、あの前じゃ、手紙書いて出そうとしたんだっ たら出さなきゃいけないってオーラあるでしょ。で、えいって出しちゃいました。案の定ものすごく後悔しました。だから、これから、ちゃんとお話できたら、西岡さんと公平くんにお伝えしたいこと、ちゃんと冷静に お話して、納得してもらえたら、お宅に届いてる手紙、破いてください」

和泉「じゃ、話します。西岡さん、中華街を歩いているとき、ここの中国の人は許せても、グラバー邸や大浦天主堂に来て、お土産買ってる中国人は許せないって言いましたよね。偽物のブランド品を大量に日本に持って 来て稼いだお金で、長崎を観光して欲しくないって」

充「覚えてないです。そんなこと言いましたか」

和泉「言いました。覚醒剤を持ち込むのもほとんどが中国系だって。税関に勤めていらっしゃるから、そういう考えを持つのも仕方ないって思いましたけど、ちょっと私、あれから違和感があって」

充「違和感ってというのは、どういう意味ですか」

和泉「そういうことで稼いだ人ばかりが、観光に来てるわけじゃないし、もし、そうだとしてみても、なにがそんなに悪いのかわかりません」

充「え、そうなんですか」

和泉「あ、悪いことをしてる人がいるってことはわかるんですよ。でも、そんなこととは違うところで西岡さんの言ったこと、気になってしまって」

充「私に、差別意識があるってことですか」

和泉「ああ、そうかもしれません。でも、そんなこと責められるほど、私のほうに差別意識がないとは言えませんが」

充「ちょっと、誤解してませんか、私のこと。」

充「私は、差別意識でこの仕事をしているわけじゃないんです」

和泉「そんなことわかってます」

和泉「それから、いつだったか忘れましたけど、あいつらは、ここに原爆が落ちたのさえ仕方ないって思ってるはずだ、そんな風に思うこと自体、腹立たしいって言ったんです」

充「言ったかどうかは、わかりませんが、それはやっぱり、腹立たしいんじゃないですか」

和泉「そうですか、そうかな」

充「そりゃそうでしょう」

和泉「仕方ないって思っていない人だっているでしょう」

充「いや、それはそうですよ。確かめたわけじゃないから。でも、もし仕方ないって思っている人がいたら、その人の人格疑うでしょう」

和泉「そこは、わかりません。そこを、問題にしてるわけじゃないんです。どうして、仕方ないって思ってる 人がいるって決めつけるんですか」

充「それはそうなんです。そう思ってる人は、中国の人には多いんです。日本は被害者意識しか持ってない、侵略戦争という加害行為のことを反省すれば、米国からの原爆投下もやむを得ないと納得するはずだって、それがわかるべきだって」

和泉「だから、それはいいんです。そういうことはよく話し合うべきだし、私にはわかりません」

充「仕方ないなんてことはないでしょう」

充「でも、わからないってこと、ないじゃないですか」

和泉「いえ、わかりません」

充「たとえ、どんな悪いことをしたからと言って、あんなものが落ちていいってことはないでしょう」

和泉「私は、考え方のことを言ってるんじゃないんです」

充「いや、考え方を無視したら、わかり合えることなんかできないじゃないですか」

充「すいません。もちろん、わかり合うために、議論してるんじゃないってこともわかってます。あなたは私

と別れるために、こういう話を始めたんですから」

妻「デザートはこちらになります。この三つからお選びください。ガトーショコラと洋梨のシャーベット、さつま芋のプリンとショコラのシャーベット、マンゴーババロア ココナッツミルクがけ。それから、クレーム ブリュレと木苺のシャーベットもこのお値段にプラス 300 円でご用意できますが。いかがなさいますか」

充「おススメはなんですか」

妻「もうそれはほんとにお客様のお好みなんです。そうですね」

充「あ、じゃ、ぼくは、ガトーショコラと洋梨のシャーベットで」

妻「はい、かしこまりました」

和泉「私も、じゃあ、それで」

妻「はい」

充「公平はなんだ。公平もこれでいいか」

公平「うん？」

充「ガトーショコラと洋梨のシャーベットでいいな」

公平「ガトーショコラってなに」

充「すいません。この子もこれで」

妻「はい、では、ガトーショコラと洋梨のシャーベット、三つお持ちしますね」

公平「な、父さん、ガトーショコラってなんだよ」

充「フランスのお菓子じゃないかな」

和泉「チョコレートケーキ」

公平「へー、あ、なんだチョコレートケーキか」

充「手紙にも書いたんですか」

和泉「なにをですか」

充「さっき、話したようなこと」

和泉「書いたとしたら、読みませんか」

充「え、どうかな。読まないかな」

和泉「読んでください」

充「じゃ書いたんですか」

和泉「それは言えません」

充「わかりました、読みますよ」

公平「すいません」

充「え？」

妻「はい」

公平「すいません、メニューいいですか」

充「え、どうした？」

妻「はい」

公平「さっきのやめて。こっちにしていいますか」

妻「えっと、クレームブリュレと木苺のシャーベットですね。かしこまりました。こちらは、お値段がこちら になりますが、よろしいですか」

公平「はい」

和泉「これからは土地や地域、国にだって縛られる時代じゃないんです。公平くんが大人になったころには、

たくさんのアジアの人がこの街にも住むようになると思います。昔のことにこだわって、自国の歴史認識をお 互い主張し合うようでは駄目なんです」

妻「こちらデザートになります。ガトーショコラと洋梨のシャーベットです。それから、こちらは、クレーム ブリュレと木苺のシャーベットになります。どうぞ、お召し上がりください。すぐにコーヒー、お持ちします ね」

公平「あ、水ください」

妻「かしこまりました」

和泉「この街は狭い。でも、港は古くから世界に開いてました」

充「言いたかったことって、そんなことだったんですか」

和泉「いえ、なんか、どっかで方向間違えました。でも、ええ、大丈夫です。なんかすっきりしました」 充「そうですか」

和泉「言いたいことを言いました」

充「で、どうなんでしょうか」

和泉「はい」

充「私は、腑に落ちませんが」

和泉「そうですか」

充「ああ、だから、もちろん、これからお付き合いをしないってことを否定するつもりはありませんよ。それ はわかりましたが、別れ話を切り出すことになった理由には納得できたわけではありません」

充「あ、そうか、だから、手紙読めばわかるってことなんでしょうか、それが」

和泉「さあ、どうなんでしょうか」

妻「どうぞ、コーヒーです」

充「同じようなこと書いてあるだけだったら、読まないほうがましですね」

和泉「それはもう、ご自由に」

充「え、読んでもいいんですか」

和泉「ええ」

充「じゃ、まだ手紙に頼ってるわけですね」

和泉「どういうことですか」

充「桑野さんは、手紙書いて保険をかけたんです。別れ話に失敗してもいいように」

和泉「ああ、ま、そうですね」

充「さっきは、ここでうまくいったなら、破れと言った」

和泉「そうです」

充「どうなんです。うまくいったんですか。これはうまくいった状態なんですか」

和泉「そんなことわかりません」

充「わからないことないでしょう。うまく行ってませんよ」

和泉「そうですか?」

充「そうですよ。見ればわかるでしょう」

和泉「見る?」

充「ええ」

和泉「見ればわかるってどういうことですか。誰が見てるんですか」

充「うん?」

和泉「誰が、どこでなにを見てるんですか。ここを誰が見てるんですか。」

充「あの、お会計、お願いします」

妻「あ、はい」

充「そもそも、別れる理由なんて納得するようなもんじゃないですよ」

妻「こちらになります」

和泉「たとえ、誰かが見てたとしても、その誰かはどうやって判断するんですか、私たちのことを」

充「あの、すみません。ここ、カード、使えますか」

妻「いえ、現金のみのお支払いになります」

充「え、あ、そうですか。え、そうでした?」

妻「ええ」

充「私、これだけ払います。あと、お願いできますか」

和泉「え。払うんですか、私」

充「え、あ、すみません。いま、現金がこれだけしかなくて」

和泉「払いますが、だってこれ払い過ぎじゃないですか、私」

充「え」

和泉「半分、払うんですか」

充「ああ、だから、わかりました。でも、ちょっと、今だけお願いできますか。あとでお金おろしますから」

和泉「ここで食事しようって言ったのは、西岡さんです。私は、喫茶店でお話すればいいって思ってたんです。だってこんなお話、二人だけでしたほうがよかったんです」

充「いまさら、なんでそんなこと言うんですか。じゃ、電話したときそう言えばいいでしょう」

和泉「ええ、それはそうですけど。こちらから提案できる感じじゃなかったじゃないですか。

いや、お食事できたのは、よかったんですよ」

充「いいです、もう、払わなくて」

和泉「払いますよ」

充「いや、いいですって」

和泉「え、じゃどうするんですか」

充「あの、すいません。これ、いま、ちょっと足りませんが、すぐに銀行でおろして来ますんで」

妻「そうですか。少々、お待ちください」

和泉「あの、払います」

充「いいって言ってるでしょう」

シェフ「名刺かなにか、お持ちですか」

充「はい」

シェフ「じゃ、一応それいただいていいですか」

充「はい、どうぞ。もうほんとすぐ、もどりますので」

充「あ、じゃ、ひとまず、これを」

妻「ありがとうございます」

充「ごちそうさまでした」

充「行きましょう」

充「ほら、公平、行くぞ」

妻「ありがとうございました」

充、和泉、公平、去る。

妻「いやな、客だった。話してる内容も最低だった」

シェフ「あ、そう」

妻「どんなにおいしい料理出しても、その料理が話題を変えたりはしないのね」

シェフ「それはそうだろう。そこまでの力はないよ」

妻「私たちが、お店持とうって思ったとき、こんなお客さんのことなんて想像もしなかった」
公平が戻って来る。

妻「あ、なにか」

公平「マフラーを忘れました」

シェフ「あ、これかな」

妻「これですか」（マフラーを渡す）

公平「それから、父がこれを。残りのお金です」

妻「あ、はい、確かに」

公平、壁の掛けてある絵を見つめる。

公平「この絵、どこの風景なんですか」

シェフ「パリです」

公平「じゃ、この川は」

妻「セーヌ川です」

公平「へー」